

第一章 神殿に立つ男

太陽というものは素晴らしい恩恵を与えてくれるし、その存在には大いに感謝すべきであろう。だが、そこには全能もなければ、慈愛が満ちているわけでもない。それどころか、その熱は肌を焦がし、野の花を枯れさせもする。その光を見ようとする者の目はくらみ、安らぎを求める者にとっては不快感すら感じさせるのだ。

その男は太陽が嫌いだった。どちらかといえば闇を愛していた。『影』と呼ばれるそのエルフは、陽の光を避けるようにして石壁の隙間を縫い、神殿前の広場へと躍り出た。そこは『異邦人の庭』と呼ばれるやたらと開けた場所で、隙間なく敷き詰められた石畳が容赦なく太陽に照りつけられてじっと耐えるように黙っている、そんな場所だった。

しなやかな筋肉、引き締められた体。年齢およそ三十歳。長寿の恩恵を失ったこの時代のエルフとしては最も力のみなざる壮年期といえよう。

その影と呼ばれる男は、広場にローデイスの騎士がいなかどうかを素早く確かめた。大丈夫だ。だだっ広い広場には、ラピスラズリの粉末で染めた群青色の鎧を着込んだ人間の姿は一つも見当たらない。わずかに数人のエルフが歩いているだけだ。それで彼は少しだけ緊張を解いた。

それにしても、なんて巨大な広場を作りやがるんだ。影はここに来るといつも、自分の醜い部分がさらけ出されるようで落ち着かなかつた。それだけじゃない。ここにいるすべての者が光にあぶり出されて、内側に隠している罪を、洗いざらい露呈されていくように感じるのだ。

実際、その一部は形となって現れていた。広場をぐるりと取り囲む回廊の前には、神殿の境内だというのに品性のない色とりどりの天幕が並べられ、神殿域に不純な色を添えていた。そこには両替人の台が置かれ、商人たちが連れてきた牛や羊、それに鳩などが所狭しと並べられ、売られていた。表向きには、それらは神への捧げ物として用意されたものだ。例えば両替人の台は異教の神が彫られた貨幣が神殿に捧げられることのないようにとの配慮から。売られている動物は、律法の書の規定に従ってどこにも傷のないものが捧げられるようにとの計らいからだ。

しかし、実際にはこれらは利得を目的とした商売だった。両替には法外な口銭が上乘せられていたし、動物は近隣の相場よりも数倍高く売られていた。しかもたちの悪いことに、これらの商売はすべて大祭司の一家によって行われているのだ。

影はずらりと並んだ天幕をかたっぱしからなぎ倒してやりたい気分だった。しかし、そんなことをすれば騒擾罪でローデイスの兵士に取り押さえられてしまう。すぐに身元がば

れて十字架刑だ。

影はもう一度広場を見渡して危険がないことを確認すると、舌を二度鳴らして合図を出した。

すぐに回廊の柱の陰からもうひとりのエルフが飛び出してきた。こちらは少し若い二十代の男だ。彼は仲間たちから『穴熊』と呼ばれていた。

影は声を落として穴熊に確認した。「落ち合う場所は『イスルインの庭』だったな」

「ええ、そのとおりです。そこで赤い羽根帽子の男を探せと、そう言われました」穴熊は答えた。

この男と行動をともしにするようになってからまだ一週間もたっていないのだが、影はどうにもこの男になじめそうになかった。心を閉ざしているとでも言おうか、この若者は明らかに闇を隠して生きている。まあ、解放軍レジスタンスなんぞに関わっている者なら誰だって多少なりとも言いたくない過去は持っているものだが、それとは明らかに違った何かを感じられた。その核心に触れそうになると、彼はすぐに暗がりに引っ込んでしまう。誰が名付けたか知らないが、『穴熊』とはよく言ったものだ。

とはいえ、解放軍レジスタンスは二人一組で行動するのが常。この男と組まされてしまったからには嫌でも行動をともしにするしかないのだが――

影と穴熊は『異邦人の庭』と呼ばれる大きな広場を横切って、その中央にある神殿へと向かった。

神殿を囲む隔ての壁にはいくつものアーチ型の門が設けられており、それぞれのアーチ部分には次のような文句が彫られていた。

『エルフならざる者、これより中に入るべからず。入ればその者に死を与えん』

南部のエルフを取りまとめる最高法院サンヘドリによって書かれたものだ。

正真正銘イスルイン・エルフである二人は、堂々とその門を通過して『婦人の庭』と呼ばれる場所へと入って行った。

人間たちが入って良いのは異邦人の庭まで。そこから先はイスルイン・エルフだけが立ち入ることを許された場所だった。つまり、婦人の庭まで来ればローデイスの騎士にばかりと出くわすこともない。

さらにその奥の荘厳な門をくぐれば、その先は『イスルインの庭』。エルフの成人男子しか入れない静かで厳かな場所だ。

影と穴熊は音を潜めてイスルインの庭へと入って行った。

イスルインの庭といっても、そこは低い手すりによって区切られた通路状の区間でしかない。手すりの先は『祭司の庭』。イスルイン・エルフの中でも特にレビリオン氏族に属する祭司だけが入ることを許された特別な場所だった。

このように、神殿域は『異邦人の庭』から始まり、『婦人の庭』、『イスルインの庭』、『祭司の庭』と徐々に入場者が絞り込まれていく構造になっていた。祭司の庭には神殿の建物そのものが立っており、その中の『聖所』と呼ばれる場所に入れる者は選ばれた祭司のみ、さらにその奥にある巨大な幕で仕切られた『至聖所』と呼ばれるもともと神聖な場所には、大祭司が年に一度しか入ることを許されていなかった。

影と穴熊が入ることができるのは、神殿を見上げるこのイスルインの庭までだ。イスルインの庭では数人のエルフの男たちがひざまずいて神に礼拝を捧^{ささ}げていた。

目的の男はすぐに見つかった。異様に目立つ赤い羽根帽子をかぶった男が、足を組んで一番奥の壁にもたれかかっている。イスルインの庭にいるということは、彼もまた神の国民のひとり、イスルイン・エルフなのだろう。

影と穴熊はその男に向かってあらかじめ取り決めてあった合言葉を告げた。

「主の用件を聞きに来た」

すると羽根帽子の男が二人を手招いて、すぐ近くまで来るようにと促す。

二人が静かな奥まった壁の所まで来ると、羽根帽子の男はようやく口を開いた。「平和を」シャローム そう言つて片手を差し出す。彼はエルフたちがする普通の挨拶をしたに過ぎない。

「平和を」若い穴熊が真面目に挨拶を返し、その手を握り返した。

と、羽根帽子の男は反対側の手を素早く穴熊の袖口に滑りこませ、そこから彼の隠し持っていた黒刃こくばのダガーを抜き取つた。

「いけませんね」男は不敵な笑みを浮かべた。「こんなものを神殿に持ち込んで」

影は瞬時にその男の実力を悟つた。穴熊から武器を奪い取るなんて、なかなかやるもんだ。穴熊も解放軍の中じゃ腕利きに数えられるほうだが、この羽根帽子の男はそれ以上かもしれない。

若い穴熊は動じる様子を見せずに、手のひらを差し出してダガーを返してくれるよう促し、こう言葉を添えた。「以後気をつけましょう」

羽根帽子の男はぼんとその手にダガーを返すと、一気に用件をしゃべり始めた。

「では手短かに。今回あなた方、解放軍レジスタンスにさし上げる情報は、ヴォルフ卿暗殺のまたとない機会です。今度の仮庵スの祭りトのとき、いつものようにヴォルフ卿は祭りに参加するため、北部からこの聖都に上ってきます。いつもなら嚴重な警備のもとに高台の宮殿に泊まられる

のですが、今回はお忍びで、あるヴォルフ党の貴族の別荘に滞在されます。その屋敷は宮殿とは違って、警備が随分と手薄です。数十人で突入すれば、容易にヴォルフ卿を仕留めることができましょう」

男は話し終えると、胸のポケットから折り畳まれた羊皮紙を取り出して、二人の前にちらつかせた。

影はそれをひったくると、すぐに開いて描かれているものに目を凝らした。

「聖都の地図です」羽根帽子の男は言った。「そして、ヴォルフ卿が泊まる屋敷はここ」赤いしるしのつけられた場所を指差す。

その場所を確認すると、影は羊皮紙を畳んで懐にしまった。代わりに銀貨がずっしりに入った革の袋を手渡す。

赤い羽根帽子の男は銀貨の袋をさっと受け取ると、「あとはあなたの方次第。精銳をそろえて事に当たることですな」と言って、さっそうとどこかへ走り去って行った。

あとに残された二人は顔を見合わせた。

「信用できるでしょうか」と穴熊。

「だまされたらそれまでってやつさ。だが、解放軍レジスタンスがやつから情報をもたらうのは、これだ。三度目らしい。これまでではうまくいった。一度目は貴族の財宝を積んだ荷車を襲ったとき。

二度目は『死の砦』^{デスホールド}に護送される途中の囚人を助け出したとき。どちらもこの男の情報によるものだ」

「それなら、まあ」穴熊は納得した。「では、報告に戻りましょう。仮庵^{カス}の祭り^{マツリ}まで一月もありません」

お前にせかされるまでもねえんだ。影はこの若者に対する煮え切らない思いを心の内でつぶやいた。

それから二人はイスルインの庭を後にして、再び陽の光にきらめく荘厳な門へと折り返した。

彼らが門をくぐるやいなや、婦人の庭にいた女たちから悲鳴が上がった。

一瞬、二人は自分たちの素性が知れたのかと思つて身構えたが、どうやらそうでもなさそうだ。女たちは解放軍^{レススタンス}の二人を見て怯^{おび}えたのではなかった。皆、恐怖の表情で空を見上げている。

影もつられて空を仰いだ。と、彼は驚愕^{きょうがく}のあまり口を大きく開いた。

竜だ。巨大な赤い竜が、その翼を目いっぱい広げ、神殿めがけて滑空してくるところだった。そのあまりの巨体に、婦人の庭から陽の光が奪われた。

竜の前足には何か握られていた。やせ衰えたエルフ。これからずたずたに引き裂かれ、食われるのだろう。影はその憐れな男の末路を思い、身震いした。

竜は神殿の上に飛来すると、翼をばたつかせてその屋根に着地した。重みで壁に幾筋もの亀裂が入る。影の足下にもばらばらと小石が降ってきた。

人々が恐怖に飲まれて見守る中、竜はつかんでいたエルフを投げ捨てるようにして神殿の屋根に立たせた。そこから落ちようものなら、まず助からない高さだ。

神殿に立った男は聖都の人々をじっと見下ろした。

竜は何かしらそのエルフに話しかけていた。あまりにも高いところにいるため、地上の人々からは何を話しているのかわからない。やがて、男が竜に対してきっぱりと何かを拒否するようにかぶりを振るのが見えた。

どんな理由があるのかわからないが、竜はこの男に手を下すことができないらしい。竜は悔しそうに目を細めると、再びそのエルフをつかんでオリーブ山のほうへと飛び去って行った。

第二章 仮庵の祭り

木々は黄色く色づいて秋の訪れを告げていた。それは、いよいよ仮庵カスの祭りツトが近づいて
いることをエルフたちを感じさせるものだった。エルフたちは木々が乾いた葉をこすり合
わせてくすくすと笑うのを感じ、心を浮き立たせていた。

豎琴の湖は朝日を受けてきらきらと輝き、眠気を覚ますように波の音をかき立てた。そ
の波打ち際では、夜の漁を終えたばかりの漁師たちが十人ばかり陸おかに上がって網の手入れ
にいそしんでいた。彼らはこの湖に寄り添うように建てられた『慰めの街』に住むイスル
イン・エルフの漁師たちだ。

慰めの街は北部ではそれなりに大きな街で、エルフと人間がともに住んでいた。『海の道』
が通る交通の要衝でもあり、この街で作られた魚の塩漬はローデイスの各地へ輸出され
ていた。ローデイスというのは、エルフたちを支配している人間の国だ。この時代、最強
の騎士団を有するローデイスは、西の大海沿岸全域を支配するばかりか、鋼の海にまでそ
の勢力を伸ばし、ドワーフたちをもその配下に治めるほどだった。

「今年ギルドは組合を代表してお前たちが聖都へ行くんだってな？」漁師の中でも一番のベテラ
ンである網元が、若い二人に向かって話しかけた。

「おっしゃるとおりで」そう答えたのは、シリオンという希望に満ちた若者だ。「私と弟のアンディアが組合ギルドを代表して、今年の仮庵コッパの祭りに行くことになりました」

彼らの言う仮庵コッパの祭りの起源は千五百年も昔に遡る。それは、律法のエルサリオンによって奴隷から解放されたイスルインの民が、神とともに荒野で過ごしたことを記念する祭りだった。エルサリオンの記した律法トラーの書によれば、仮庵コッパの祭りは七日間続き、そのあいだ、民は掘っ立て小屋に住まなければならない。南部にある聖都に神殿が建ってから、そこに巡礼して祭りを祝うのが彼らの習わしだった。とはいえ、聖都から遠い北部の街ともなれば、全員が行くわけにもいかない。多くの場合は代表者を送るのが常だった。

「祭りのあいだ、私の船と雇い人たちをよろしくお願いします」若いシリオンは網元にへつらうように言った。

「ああ、任せておけ」と網元。「だが、お前のような甘っちょろい扱いは期待せんほうがいぞ」

それを聞いたシリオンと雇い人たちは引きつった笑みを浮かべた。

まだ若い二十代のシリオンは、こう見えても自分の船を持っていた。キャラベル船オスロンド号。クラムドールに移住したイスルイン・エルフを最初に統率した士師スカール、緋色レットのオスロンドにちなんで名付けられたその船は、弟のアンディアのほかにも五人の雇い人を乗せ

でもまだ余裕があった。

それだけではない。シリオンはこの慰めの街にまずまずの大きさの家まで所有していた。五年前、父の遺産をはたいて船を新調したシリオンとアンディアの兄弟は、『フィッシュヤーズホーム漁師の家』と呼ばれる小さな村からこの慰めの街に移住してきた。慰めの街に居を構えた彼らは、その街で一番の腕利きだった網元と組んで刺し網漁を始め、大成功を収めた。そればかりか、シリオンの行動力とアンディアの交渉術で、若い兄弟はあつという間に網元を追い抜き、組合ギルドの中で一番の稼ぎを見せるようになった。シリオンはその金で家建てると、妻のマルリルとその母親、それに弟のアンディアと一緒に住ませた。小さな漁師の村から船出してからというもの、彼の人生は順風満帆だった。

そう、このときまでは――

「都上みやこりは初めてか？」網元がその赤ら顔に満面の笑みを浮かべてシリオンに尋ねた。

聖都に上ったことがないのは知っているはずだ。つまり、彼は自慢話をする機会をうかがっているのだ。

「やれやれ、また始まるぞ」シリオンと同一年の、網元の長男アランがうんざりしたように首をぐるぐると回した。

「本当だ。もう耳が腐っちまうよ。そんなことだから母ちゃんに逃げられちまうんだ」次

男のイヴォールも白目を剥く。

「お前らは黙ってればいいんだ」網元はアランとイヴォールを叱りつけ、笑顔でシリオンのほうへ腰をずらした。「いいか、聖都というのはな、いずれ俺たちの王になる方が住まわれる都なんだ」

そう切り出すと、網元は頼まれもしないのに歌い出した。

『主の御霊が我が上におられん。

主は貧しき人々に福音を告げ知らせるために、我に油を注がん。

主が我を遣わされしは、捕らわれ人を自由にし、盲人の目を開かんがため。

踏みにじられし人々を解放し、主の恵みの年を告げ知らせんがためなり』

歌い終わると、網元は満足そうに聴衆を見渡した。

若いシリオンは胸が熱くなった。聖書に書かれた救い主の預言だ。魂の奥底から希望が湧き上がってくる。そうとも。そこには、神がイスレインのために救い主を送ってくださいと預言されているのだから。

「さてお前たち」気がつくくと、網元の手にはいつの間にか酒瓶が握られていた。「この、油

を注がれる方というのが——」

「救い主^{メシヤ}。俺たちの王になる方だって言いたいんだろう？」次男のイヴォールが先に答えた。

「ああ、そうとも」話の腰を折られた網元は口直しに酒を一口あおった。「だが、これは知るまい。その方がついに現れなすつたんだよ」

これにはさすがの若い漁師たちも驚きの表情を隠せなかった。

網元はにやりと笑みを浮かべると、得意げに話し始めた。「王といっても、もちろん北部の領主ヴォルフ卿なんかじゃないぞ。やつは荒野^{ワイルド}エルフだ。俺たちの王はイスルイン・エルフでなければならん。律法^{トイラ}の書にそう書いてある。もちろん南部の領主ピラー卿でもないぞ。やつに至っては人間だ。エルフですらない」

そう話す初老のエルフの瞳には、人間に対する憎しみが見え隠れしていた。

混迷を極める時代だった。イスルインを取り巻く政治的な状況は複雑に絡み合っていた。律法のエルサリオンが民をこの地に連れて来てからおよそ千五百年。エルサリオンの後継者であるイスタミア將軍によって征服されたクラムドールの地は、今日、強大な人間の国ローデイスによって分割統治されていた。聖都のある南部地方は人間であるピラー卿によって治められ、シリオンたちの住む北部地方は荒野^{ワイルド}エルフの血を引くヴォルフ卿によって

治められていた。イスルインの指導者たちで構成される最高法院サンヘドリシは、ある程度の自治権を認められてはいたものの、その力の及ぶ範囲は南部地方にとどまり、幾つかの権限をかうじて与えられているに過ぎなかった。

ローデイスの統治は平和をもたらしはしたが、イスルインの民はその重税に苦しんでいた。人間たちの手先となったエルフの取税人は非合法に税を上乗せして取り立てる始末。それに加えて、最高法院サンヘドリシまでもが神殿税や十分の一税を取り立てるのだ。イスルインの民は——かつてイリアスの地で奴隷であったように——再び権力の奴隷と成り果てていた。

唯一の希望は救い主メシアだ。エルフたちはその王——数々の預言者によって預言されてきた救い主メシア——の到来を待ち望んでいた。もちろん、シリオンも王を待ち望む神の国民のひとつだ。もし、あの偉大な王、アラボルのような方が再びイスルインに起こされるのであれば、どんな犠牲を払っても構わない。ましてや、直接お仕えできるならそれ以上の喜びはなかった。だが、その方が誰なのか、どうしてわかるかというのだ——

「俺には心あたりがあるんだ」網元の魚のような瞳がきらりと光った。「俺たちの王、救い主メシアはすでに現れている。ガラドゥイン川にな」

それから数日後、シリオンとその弟アンディアは慰めの街の漁師組合ギルドを代表して

仮庵カアンの祭りマツリを祝うために聖都へ向かった。

彼らには祭りで捧げ物ささげものをするほかに、もう一つの目的があった。ガラドゥイン川に現れたという男に会うことだ。網元によれば、その男こそ、来たるべき救い主メシアだという。網元はその話を、南部から来た付き合の古い商人から聞いたのだそうだ。兄弟はその真偽を確かめるために、彼の言う男に会いに行ってみることに決めていた。

さて、北部と南部の間には『番人の森』と呼ばれる大きな森が横たわっていた。そこに住む人々は半エルフハイフと呼ばれている。彼らは純粹なエルフではなく、かつてイスルインが北ドワーフ大国によって捕囚された時代に混血となった者たちだ。

もともとは同じ祖先を持つ兄弟であるにも関わらず、イスルイン・エルフは彼らを蔑んだ。それで二つの民は反目し、神に礼拝さいぎを捧げる場所まで分けるようになった。イスルイン・エルフは聖都にある神殿で礼拝さいぎを捧げ、半エルフは『双子の山』で礼拝さいぎを捧げた。どちらの民も、自分たちの礼拝こそが正しいのだと主張し合っていた。

そういうわけで、わざわざ番人の森を通して聖都へ向かうイスルイン・エルフはいない。当然、シリオンたちも半エルフハイフの住む『番人の森』を避け、ガラドゥイン川を渡って東側の道を行くことにした。

夜通し歩いて朝焼けが見え始めたころ、二人は彼の有名な『エルフ平原』を見下ろす丘に出た。なんと美しい眺めだろう。二人の兄弟は思わずため息を漏らした。

薄明かりの中に、黄金の海が広がっていた。目の端から端まで広がる黄金色の大草原。風に揺れる大麦の畑。古めかしい風車が朝靄の中で寝息を立て、草木は秋の風を受けてさわさわと寝返りをうっていた。点々と居並ぶオリーブの低木から低木へと鳥たちが歌ってまわり、寶石のような朝日が今、この美しい大地を目覚めさせようとしていた。

「こんな景色は見たことがない」シリオンはもう一度大きなため息をついた。

「その昔、ダークエルフたちはこの平原をラドゥグウェンド、すなわち乙女の平原と呼んだそうだよ」アンディアが言った。「もしエルフ語で名付けるとすれば、まさにそれだね」シリオンもその名がびったりだと思った。

二人の漁師がエルフ平原を抜けて聖都にたどり着いたのは、翌日の夕方、仮庵の祭りが始まる前日だった。この祭りこそ、救い主の到来と、預言されし神の王国の設立を待望する祭りだった。例えば水取りの儀式。その儀式の一番初めに、大祭司は聖都の南側にある『使者の池』から金の柄杓で水を汲み、神殿まで運んで祭壇に注ぎ掛ける。祭壇の傍らには近くの川から引き抜いてきた柳の木が立ててある。柳というものは水を失うと一日で枯れ

てしまふ。そこで、祭司たちは祭壇の周りを回って、「救い^{ホサナ}を、救い^{ホサナ}を」と救い^{メシア}主に向かつて叫ぶのだ。救い^{メシア}主が到来すれば、柳の木は命を得るはずだから。なぜなら、その日、聖都からは命の水が湧き出ると預言されているからだ。

兄弟はまず、オリブ山と呼ばれる小山に登った。そこで二人は初めて目にする聖都の光景に圧倒された。

聖都は周囲を厚い城壁に囲まれ、金色の夕陽を受けたその堂々たる風格を巡礼者たちに見せつけていた。まず目につくのが神殿だ。広大な広場の真ん中に建てられた白と金の巨大な建造物は、まだ建築途中ではあるものの、圧倒的な存在感を放っていた。そして、広場の隣には六百名ものローデイス兵を駐屯させる『青の城塞』。広場の奥の高台には、師^{ラビ}になるための教理を教える『神学の塔』がそびえ立っていた。

二人の兄弟はそれだけで胸がいっぱいになった。北部に住む素朴な漁師にとって、これ以上の刺激は耐え難い。そこで、兄弟は聖都に入るのを明日にして、この日は城壁の外、オリブ山の麓にある『油搾りの園』という場所で野宿することに決めた。

油搾りの園はオリブの木がいくつも植えられた美しい庭園だ。彼らのほかにも祭りのためにやって来たたくさんのエルフたちがその庭園で休んでおり、彼らの間を群青色の鎧^{よろい}を着たローデイスの兵士たちが目を光らせながら歩いていた。

「いよいよ明日は聖都を見て回れるんだね」アンディアが熱いため息を漏らした。

シリオンはうなずいた。「あの黄金の門から中に入れば、そこが神殿の丘だ」彼は城壁に据えられた金色の門を指差した。「中には異邦人の庭と呼ばれる大きな広場があつて、そこで捧げ物を買うんだ」

「まるで見てきたみたいに言うんだな」アンディアが笑った。

「ああ、見てきたさ」シリオンは弟に挑戦的な目を向けた。「イスルインの長子は贖いのために神殿で山鳩二羽を捧げることになっている。そのときに、俺はこの目でしっかり見てきたのさ」

アンディアが吹き出し、シリオンも笑った。確かに、長子であるシリオンは聖都に連れて来られて、山鳩二羽で贖いの儀式を済ませたことだろう。しかし、そのときシリオンは赤子だったはずだ。

若い二人の漁師は持ってきた魚の干物を食べ終えると、手頃な木の枝を拾って結わえ、その上に棕櫚の葉で屋根を作つて仮庵をこしらえた。祭りのあいだはこの掘つ立て小屋で過ごすのだ。

隙間だらけの屋根の下に並んで横になると、二人はごつごつとしたオリブの根を枕にして眠った。土のいい香りが心を満たしてくれた。屋根の隙間からは、彼らの前途を祝す

ように、たくさんの星が瞬いていた。

夜が明けた。祭りの初日だ。

兄弟は目覚めるとすぐに黄金の門を通過して聖都の中へと入って行った。

「なんて広いんだ」とつさにシリオンは驚きの声を上げた。

彼のいうとおり、異邦人の庭は、彼らが見たこともないほど広大な広場だった。

「こんな場所は北部のどこにもないな」アンディアが言った。「それに、この人数ときたら

——

すさまじい巡礼者の数と熱気だった。祭りの時期とあって、異邦人の庭には大勢のエルフたちが押し寄せており、所狭しとひしめき合っていた。

さらにシリオンが驚いたことに、都中が網元の言っていたあの男の話で持ちきりだった。その男は預言者だと噂うわさされていた。なんでも、その預言者は新しい教えを説きながらガラドウィン川の水で洗礼バプテスマを授けているという。すでに南部の多くの者がその人から洗礼バプテスマを受けて、喜びに満たされていた。

「こんなにも世間を騒がせている預言者がかつていただろうか。なあ、明日、俺たちもそのお方から洗礼バプテスマを受けようじゃないか。それだけじゃない。弟子にしてみらうんだ」シリ

オンは目を輝かせ、鼻息も荒く弟に提案した。

「ああ、それがいい」アンディアも同じ意気込みを見せた。「もし王になるお方なら、お近づきになっておくに越したことはないからね。もしかしたら、将来、王国の役人にでも取り立ててもらえるかもしれない」

二人の漁師は大漁を喜ぶときのように互いの拳をぶつけあった。

「でもその前に兄さん」アンディアが急に真面目くさって言った。「我々は組合ギルドを代表して捧げ物をしに来たんですからね。どうぞ、そのことをお忘れなく」

シリオンは照れ笑いを返したが、弟の瞳にも自分と同じ期待の光が輝いているのを見逃さなかった。

第三章 ヴォルフ卿の暗殺

祭り初日の熱気がようやく収まって街中の人々が眠りについたころ、百名ほどの黒装束の男たちがとある屋敷を目指して夜の市街を急いでいた。全員が黒いマントに身を包み、手には光を反射しないよう刃を黒く塗ったダガーが握られていた。

「そこを右！ 次は左だ！ ぐずぐずするんじゃねえ」

『影』は屋敷へ向かう男たちに混じって指示を出していた。その傍らには、彼よりも少し若い『穴熊』が従っている。

高台に向かう坂を登って小さな堀を渡ったところで、ようやく彼らは目的の屋敷にたどり着いた。その地所の周りには背の低い象牙色の石垣が丁寧な積まれていた。手入れの行き届いた赤い薔薇が、庭園の中で月光を浴びて静かに眠っている。

屋敷のすべての窓にはカーテンが引かれていた。その奥に明かりが灯ともっている様子はない。

「あまりにも静かだな」影は声を潜めて言った。

「外に見張りもないようです。あの羽根帽子の男の言ったとおり、警備が手薄なのでしよう。もしくは、ヴォルフ卿が泊まっていることをわからせないようにするための施策かも

「しれません」と穴熊。

影はこの若者の素直さを鼻で笑った。お前は这个世界では長生きできんだろうな。とはいえ、ここでやめるわけにも行かぬえわけだが。

「行くぞ。荒野ワイルドエルフの偽君主にせに目に物見せてやれ」

影の合図で百人の男たちは屋敷の扉を蹴破って中へ突入した。扉は派手な音を立てて壊れたものの、慌てて誰かが出てくる様子もない。不審に思いつつも、暗殺者たちはエルフ特有の暗闇を見通す第二の視覚インフラヴァイジョンを使って、真っ暗な屋敷の中になだれ込んでいった。

解放軍レジスタンスの戦士たちは幾手にも別れて次々と階段を上り、部屋に突入していった。だがおかしな事に、しばらくしても悲鳴や剣を交える音は一切聞こえてこない。

やがて戦士たちは異変に気づいて一階の大広間へと戻ってきた。

「おかしい。誰もいないぞ」戻ってくる戦士たちは口々にそう告げた。

そのときだ。屋敷の外でいくつもの松明たいまつが一斉に灯された。

完全な暗闇でなければ第二の視覚インフラヴァイジョンは働かない。たちまち有利な視力を失った解放軍レジスタンスの戦士たちは、窓の所に集まって松明たいまつのもとに目を凝らした。

見ると、数百人ものローデイスの兵士が屋敷をぐるりと取り囲んでいた。ラピスラズリ

の粉末で染めた彼らの鎧よろいが火明かりを受けてきらきらと光っている。彼らの持つ盾に描かれた紋章は狼おおかみ。ヴォルフ卿の騎士団だ。

「畏か。卑怯者め！」影は戸口に立って激しく毒づいた。

「卑怯者とはお前たちのことだ」兵士たちの中から彼らを率いる騎士が進み出た。

面頬は着けておらず、頭には赤い羽根帽子をかぶっている。

その顔を見るなり、影と穴熊は息を呑んだ。今回の情報を提供した、あの赤い羽根帽子の男ではないか。

「貴様、ヴォルフ党の者だったのか」影はその騎士をにらみつけた。

「いかにも」羽根帽子の男は堂々と答えた。「我が主君を暗殺しようと企む卑怯なネズミどもを駆除せねばならんのでな。餌代は高くついたが、そのかいがあったようだ」

「俺たちにわざと財宝を奪わせて、囚人までおとりに使いやがったのか」影はダガーを握る手に力を込めた。

「そのとおり。野蛮なお前たちにはちょっと贅沢ぜいたくすぎる餌だったかな」

羽根帽子の男は腰に下げたサーベルを引き抜いた。

穴熊が急いで影に進言する。「屋敷の中においては本当に袋のネズミです。とにかく外へ出なければ！」

仕方がねえ、この若造の言うとおりで。

「全員表へ出る！」影は叫んだ。と同時に、ローデイスの騎士団も突撃を開始した。

騎士団と解放軍^{レジスタンス}は激しく衝突し、戦いは凄絶を極めた。だが結局、解放軍^{レジスタンス}の戦士は屋敷の中に押し戻され、籠城^{レジスタンス}を余儀なくされた。

籠城^{レジスタンス}といっても、解放軍^{レジスタンス}にとってその状況が有利に働くことなど何一つなかった。次々と仲間が倒れていく中、影と穴熊は勇猛果敢に戦った。だが、到底勝ち目はない。数の上でも装備の上でも、騎士団のほうが数段上回っていた。兵士たちは赤い羽根帽子のエルフの指揮のもと、屋敷の玄関に押し寄せて、次々と解放軍^{レジスタンス}の戦士たちを殺していった。

騎士団が屋敷になだれ込むと、ついに影は死を覚悟した。最後のあがきとばかりに、暗殺者たちは屋敷中に身を潜めて抵抗を試みた。が、赤い羽根帽子の男は次々と彼らを見つけて出しては討ち取っていった。

うっすらと夜が明け始めるころには、残りわずか数名の戦士が屋敷の二階にある一室——おそらく書斎で、家具はすべてダークブラウンで統一されている——に鍵をかけて潜んでいるのみとなった。

「もはやこれまでだ」影はいよいよ覚悟を決めた。黒く塗ったダガーを自分の喉に当てる。

ほかの戦士たちも自分のダガーを握る中、穴熊だけはかぶりを振った。「まだ負けたわけではありません」

「何を言ってるやがる。もう手立てはねえ。この人数で打って出たところで返り討ちに合うだけだ。下手すりゃ生け捕りにされて拷問を受けるだろう。そのときになってから殺してくれと泣き叫んでも、やつらは聞いちゃくれねえぞ」影は脅しをかけるように言った。

「いいえ、生き残る手立てがまだあるはずですよ。生きてさえいれば、いつか必ず復讐してやれる」穴熊の目はいつになく決意に満ちており、その「復讐」という言葉には特段に力がこもっていた。

この若造にこんな気概があるうとは。影は穴熊の意外な一面を見たような気がした。むしろ、この男こそ真っ先に生きるのを諦めるんじゃないかと思っていたが。

影は穴熊の目をじっとのぞき込んだ。確固たる信念、そう呼べるものが若者の瞳に浮かんでいた。

「だったら考える。この状況で生き残る方法があるならな」

すると穴熊はしばらく考える様子を見せた。それから立ち上がると、彼らの潜んでいる部屋の窓を大きく開け放った。

「ここから飛び降りて神の審判を仰ぎましょう。もし神の御心ならば、我々は生き延び、復

響のときを得られるでしょう」

影がその窓枠から身を乗り出して下をのぞき込むと、やや離れたところに堀が見えた。堀には暗い水がたたえられている。飛び込めるかどうかぎりぎりの距離だ。

すでに穴熊は窓枠に足を掛けていた。

影が決めかねていると、彼らの潜んでいる部屋の扉がぱりぱりと音を立てて壊れ始めた。木っ端が飛び、裂けた板の隙間から鉄の刃が突き出した。扉に向かって外から斧が振り下ろされている。ついに、兵士たちがこの部屋の捜索に乗り出したのだ。

もはや考える時間はなかった。

「仕方がねえ。全員あの堀に飛び込むんだ」影は決断を下した。

生き残った解放軍レジスタンスの数名は、意を決して窓枠に足を掛けると、外の薄暗がりの中へと飛び出して行った。

水の中から死に物狂いで顔を出したとき、影が最初に見たのは穴熊の苦しそうな顔だった。ほかの連中の姿はどこにも見当たらない。

影は堀の壁面まで泳ぎ、石垣につかまった。それから振り向いて穴熊の様子を見る。ついで来るものと思っていたが、依然として穴熊は同じ場所でもがいていた。泳げないのだ！

「つかまれ！」影は堀の石垣に片手を掛けたまま、必死にもう片方の手を若者に伸ばした。声が聞こえたのか、穴熊が手を伸ばし、影はどうかその手をつかまえることができた。一気に引つ張って石垣につかまらせると、穴熊はごほごほと水を吐きながら咳込んだ。

「お前、泳げもしねえのにあんなことを言いやがったのか」咎めるように言う。

穴熊は苦しうに笑顔を返した。

あきれたものだ。ともあれ、ぐずぐずしてはられない。水音を聞きつけて、すぐに兵士たちがやって来るはずだ。

周囲を見ると、そう遠くない場所に堀から上がれそうな階段が見えた。

二人は水に浸かったまま堀の石垣沿いにその場所まで行くと、水から体を引き上げた。濡れたマントが石の上に水たまりを作る。

最後にもう一度振り向いてみたものの、やはりほかの仲間は見当たらなかった。うまく堀に飛び込めずに石垣に激突したか、飛び込んだものの浮かび上がることができなかったか――

いずれにしても、彼らのことは諦めるしかなかった。

騎士団はすぐに追ってきた。

影と穴熊は服や髪からしづくをまき散らせながら、朝日にきらめく聖都の路地をひたすら走った。

気が付くと、前方に『使者の池』が見えた。祭りのあいだは水取りの儀式でこった返すその場所も、早朝の今はしんとして誰の顔も映してはいなかった。

池の向こうには城壁と一体となった大きな見張り塔が立っている。塔は修復中のようで、丸太がいくつも組まれ、朝の早い職人たちが数名上り下りしているのが見えた。塔の傍らには外門が見える。そこから都の外に出ることができぬ。

だが、門の周りにはローデイスの兵士が何人も見張りについていた。それ以外に出口はない。

影が後ろを振り向くと、まだ距離はあるものの、赤い羽根帽子の男を先頭に、群青色の鎧よろいを着た兵士たちが猛然と押し寄せてくるのが見えた。

もはや引き返すわけにもいかない。門衛たちの脇をすり抜けて外に出るしか——
がしかし、先を見越した羽根帽子の騎士が外門のそばに立つ兵士たちに呼びかけた。「そいつらを止めろ！」

門衛たちは門に向かって走り寄ってくる黒装束の二人に気が付くと、彼らを逃すまいと腰の剣を抜いて身構えた。こうなっては門から逃げることも不可能だ。

「あの丸太の足場を上るしかねえ！」影は前方の塔を指差した。

穴熊は了解したとばかりにうなずき、塔を目指して走った。

だが、いざ塔の根本まで来て足場を上ろうとすると、そううまくいくものでもなかった。熟練の職人でもなければ安々とは上れない。二人が無理に上ろうとすると、足場が揺れて職人たちの怒号が飛んだ。

そのあいだにも、騎士団はぐんぐん間合いを詰めてくる。

「上るのは無理だ」影は諦めて地面に飛び降りた。

穴熊も同様に飛び降りたが、その表情に諦めの色は一切見られない。

「あれだ！」穴熊が指差す。その先には、使者の池とつながった水路の入口があった。

「早く！ あの水路に入るんです。ぐずぐずしている暇はない」

何が彼を急ぎ立てるのか、穴熊は異様な執念を見せた。

若者の向かう先には、池とつながった石のトンネルが口を開けている。

影は促されるがままに、そのトンネルに向かって走った。大柄の男でも身をかがめずに入れるほどの立派な石組みのトンネルだ。中に駆け込むと、ひんやりと空気が冷たかった。そのときだ。ごろごろという不吉な音が鳴り響き、「危ない！」という職人たちの声が飛んだ。

影はとっさに振り向いてトンネルの外の光景を見た。まるで時が止まったようだった。外の光の中に、群青色の鎧よろいを着た兵士たちが迫っていた。その手前では丸太の足場が崩れ、まるで二人を追っ手から分け隔てるように、大きな塔の石組みが降り注いでいた。

次の瞬間、轟音とともに崩れ落ちた塔はトンネルの入口を塞いでしまい、解放軍レジスタンスの二人は完全に闇の中へ閉じ込められてしまった。